

第 98 回公開シンポジウム

文化が子どもの発達を創る ～教科書と保育者に見る「いい子」像～

◆ プレゼンター

塘 利枝子

同志社女子大学現代社会学部現代こども学科教授／発達心理学・文化心理学

◆ パネリスト

北 野 幸 子

神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授／乳幼児教育学・保育学

◆ 司 会

一 色 伸 夫

甲南女子大学総合こども学科教授／子どもメディア学

一 色：第 98 回子ども学講演会を始めます。今日は夢工房の先生方がたくさん来られています。

本日のテーマは「文化が子どもの発達を創る～教科書と保育者に見る「いい子」像～」です。保育者をはじめとして、子どもを取り巻く大人たちの発達期待の内容は、その後の子どもの発達に大きな影響を与えます。日本と海外の小学校教科書に描かれた「いい子」像と、日本と海外の実際の保育現場での保育者の行動から、日本の保育者がどのような文化的特徴の中で保育実践を行い、子どもの発達を「創って」いくかについて考えます。今日の基調講演は同志社女子大学現代こども学科教授の塘利枝子先生です。塘先生のご略歴を申し上げます。白百合女子大学大学院文学研究科発達心理学専攻で博士、甲子園短期大学、平安女学院大学を経て同志社女子大学におられます。研究としては、文化間移動する子どもたちの言語やアイデンティティ、それに関わる教師、保育者の価値観についてなどいろいろな研究をされています。ご著書も『子どもの異文化受容』『アジアの教科書にみる子ども』など、多数ございます。

それから、もう一人おいでいただいているのは、北野幸子先生です。北野先生は神戸大学大学院人間発達環境学科研究科准教授で、ご専門は乳幼児教育学、保育学です。ご略歴は広島大学大学院教育学研究科博士課程後期、幼児学専攻、博士（教育学）ということで広島大学の後、広島国際大学、福岡教育大学を経て神戸大学においでのなっています。ご著書には、27 年度『認定こども園の時代』『教育と福祉の課題』『子どもの教育原理』など多数ございます。

では、早速、塘先生、よろしくお願いいたします。

塘：皆さん、こんにちは。甲南女子大学に初めてうかがったのですが、とてもきれいなキャンパスで感激いたしました。

今日のテーマなのですが、「文化が子どもの発達を創る」です。今日は学生さんがとても多いですが、皆さんは発達心理学を授業で習っているかと思います。授業の中で、発達とは遺伝と環境との相互作用

であると習ったと思います。私も発達心理学が専門ですので、遺伝、特にヒトという種に生まれてきたら、どの文化においても同じように発達をしていく遺伝の既定因は、とても大きいと思います。それを私も否定はいたしません。ただ、今回は環境に焦点を当ててお話ししたいと思います。環境の中でも文化という環境が、一体子どもたちにどのような影響を与えているのかについてです。そして皆さんたちが教員や保育者になる上で、どんな文化を背負って今まで生きてきたかについても、小学校の教科書と、保育現場の保育者の語りや行動をもとに比較分析した結果でお話したいと思います。

1. 意味空間に埋め込まれた社会的な期待と価値観

子どもは無機質な世界に生まれてくるのではなくて、「意味空間に埋め込まれた」文化や社会の中に生まれ、育っていきます。日本で生まれたら日本社会や文化の中で、またはアメリカに生まれたらアメリカの文化の中で、生まれた瞬間から、もしかすると生まれる前から子どもは文化のシャワーを浴びることになります。その中で大人たちが、子どもにいろいろな期待をかけていきます。様々な価値観を持って子どもに接していきます。そういった期待や価値観が子どもたちにどのように内在化されていくのか、今日は3つの点に絞ってお話したいと思います。

一つ目は、小学校教科書に描かれた「いい子」像の国際比較です。多分、大学生の皆さんは、この2000年に出版された日本の教科書を使っていると思います。その頃の小学校1年生から3年生までの教科書です。韓国、中国、台湾の教科書もあります。この中に一体どんな「いい子」像が描かれているかを、国際比較をしてお話したいと思います。

二つ目に、「はずれた」行動に対する保育者の期待です。「はずれた」行動とは、けんかをしたり、ルールにはずれた行動といった大人が望まない子どもの行動のことを指しています。けんかが起きたり、ルールにはずれた行動を子どもたちがした時に、保育者が何らかの形で止めます。その止め方に、保育者の期待感、価値観が反映されていることを、国際比較の中でお話しします。

そして三つ目に、日本ではよく「察し」という言葉が使われますが、「察し」の能力がどのように育まれてきたかについて、保育・教育方法の比較分析をした結果についてお話しします。

図1ですが、これは個人を取り巻く生命生態学モデルと言われる、ブロンフェンブレンナーの有名な図です。多分、授業で習っているかもしれません

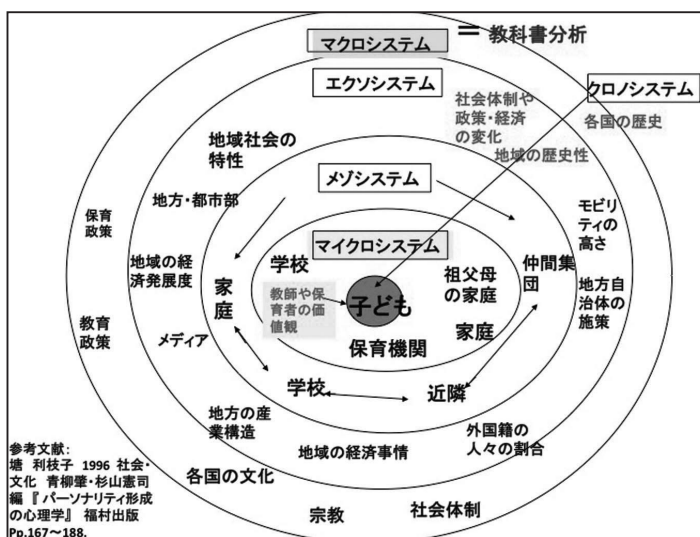


図1 個人を取りまく生命生態学モデル (ブロンフェンブレンナー (1979,1986) のモデルをもとに作成)

が、ご説明します。

まず真ん中に子どもがいると考えてください。例えば学校、幼稚園、保育所、または子ども自身の家庭、祖父母の家庭といったような、子どもから一番身近な環境、これを〈マイクロシステム〉とBronfenbrennerは呼んでいます。そして、その外側には〈エクソシステム〉があります。これは、例えば地方の教育委員会の考え方、地方の経済発展度、地方の産業構造などです。私は関東の出身なのですが、関東から関西に来た時になんと違うのだらうと思いました。言葉も違うし、対人行動も違うので戸惑った覚えがあります。やはり関東と関西では、子どもを取り巻く環境が違ってきます。そして、さらにその外側に、〈マクロシステム〉があります。これは教育政策、保育政策、各国の文化、社会体制、宗教などを指しており、これらの〈マクロシステム〉は、子どもの育ちに影響を与えています。教科書の内容もこの〈マクロシステム〉が反映されたものと考えられます。

では、この〈メゾシステム〉ですが、これは、Bronfenbrennerが言うには、〈マイクロシステム〉間の相互関連を指しています。子どもの家庭と保育機関との関連や、家庭と学校との関連、保育機関と学校との関連など、〈マイクロシステム〉相互間のものを扱う。例えば、家ではある躰方法をしているけれども、学校ではそれを重視していないなどというマイクロシステム間のずれなどを扱うのが〈メゾシステム〉です。または〈エクソシステム〉と〈マイクロシステム〉の違いも〈メゾシステム〉で扱います。地域では当たり前の行動が、保育機関や家庭では当たり前ではないことがあります。例えば現在関西に住んでいるけれども、両親共に関東出身だということ、地域のやり方と家庭のやり方との間ではずれが出てきます。そういったずれを扱ったり、相互関連を扱ったりするのが〈メゾシステム〉といわれています。〈マクロシステム〉が〈エクソシステム〉に影響を与え、そして〈マイクロシステム〉に影響を与えることを考慮しながら、子どもの発達を取り上げていくことが重要です。

もう一つ〈クロノシステム〉があります。今回、私の話の中では特に扱いませんが、これは簡単に言う「時間や時代」です。例えば、昭和の時代と平成の時代では人々の考え方や行動様式は違います。そういった時代間による変化を取り上げるのが、〈クロノシステム〉の部分です。これを頭の中に入れていただいて、教科書の話聞いてください。

2. 教科書に描かれた「いい子」像の国際比較

(1) 教科書の特性

先ほど東アジア4ヶ国の教科書をお見せしましたが、これらはフランス、イギリス、ドイツの教科書です。よく大学の授業で、本物の教科書を持ってきて学生に見せると、それだけで夢中になって私の話を聞かずに授業が終わってしまうことがありますが、教科書とはそのように夢中になるほどとても面白いものです。教科書制度も違いますし、見た目も違います。例えば欧米の教科書は厚めです。日本のような薄い教科書ではなくて、学校備え付けとなっています。これは日本で2000年に出版されたすべての出版社の国語教科書です。日本は検定教科書ですので、この6社のどれかを若い皆さんは使っていたと思います。懐かしい教科書があるのではないのでしょうか。また若い皆さんには、この2000年出版の教科書が懐かしいと思うかもしれませんが、多分、この会場にいる私も含めて一部の方の中には、

こちらの1960年出版の教科書が懐かしいと思うかもしれません。教科書の中身を見てみると、今とは異なりお母さんが割烹着をきています。

これは各国の1950年から2000年に出版された教科書です。台湾、韓国、中国の教科書も日本と同様に1950年から2000年を並べてみると、表紙を見ただけでも、ずいぶん子ども像が変わってきたのが見て取れると思います。このように時代的にみても教科書は面白いのですが、今回は2000年出版の教科書に話を絞ります。

では、本題に入ります。教科書に描かれた「いい子」像の国際比較です。

なぜ私が教科書を分析材料にしたかについて、2つの理由があります。

まず一つは、教科書が学校、教育の場で使用されるということです。先生たちは教科書を使って次世代の子どもたちにいろいろな価値観を教えていく。つまり社会化（ソーシャライゼーション）の道具の役割を教科書が担っています。教科書には大人たちが一所懸命作っている公文書的な特徴があります。いま一つの理由として、それぞれの国が時間と労力をかけて教科書を作っているという点です。特に日本の教科書は、無料で子どもたちに配布されますので、そこに多額の税金が投与されます。そういった意味で各国社会、各時代の人々の状態や次世代への期待が反映されていると言えます。そして教科書を通して子どもたちに一定の価値観が、いわば刷り込まれていく。そういったソーシャライゼーションの道具であるという特色を教科書が持つため、漫画や児童書ではなくて、私は教科書を使って各国の大人たちの期待像を見えています。アップルら（Apple and Christian-Smith,1991）は、「教科書は単なる事実の伝達システムではない。社会が合法的で真実であると見なすことがらを創造する」と言っています。東アジア4ヶ国、日本、中国、台湾、韓国そして、欧州3ヶ国ドイツ、フランス、イギリスの教科書进行分析することで、各文化・社会の大人たちが描いている子どもたちの期待を比較分析していきます。

(2) 感謝の気持ちの表現の違い

ここで皆さんにクイズをしたいと思います。これはある国の教科書です。どの国のものか考えてください。「突然、大雨が降ってきたので、母親があなたの学校まで傘を持ってきてくれた。ちょうどあなたと一緒にいた先生が、『あなたはお母さんにこんなにかわいがってもらえて、本当に幸せですね』と言いました。さあ、あなたなら先生に何と言いますか。」三択で考えてみてください。1番目は、「先生に対しては何も言わず、心の中で『私は本当に幸せな子どもだ』と思う。」2番目は「『先生、あほちゃう?』と笑い飛ばす。」3番目は、「『先生、親の恩を覚えてくれてありがとう』と言って感謝をする。」さあどれでしょうか。

1番の先生に対しては何も言わず、心の中で「私は本当に幸せな子どもだ」と思う方は手を上げてください。では2番、「先生、あほちゃう」と言って笑い飛ばすという方。3番目の「先生、親の恩を覚えてくれてありがとう」と言って感謝をする方、いないですね。1番を選ぶ人が一番多いようですね。

国のタイプ別に今の3つを分けてみました。1番目は日本の教科書に多く見られる型です。2番目はドイツに多い型です。そして、3番目は台湾に多い型です。では、今のクイズはどの国の教科書からでしょうか。答えは台湾の教科書です。内容は今お話ししたものと同じ状況です。雨が降ってきました。そこ

でお母さんが傘とレインコートを学校に持ってきてくれて、この娘に着せようとしたのです。すると、そこにいた先生が、「あなたは本当にいいお母さんを持って幸せね」と娘に言います。するとこの娘は「先生ありがとう。親の恩を教えてくれて」と言うのです。

私は最初この娘の発言を不思議に思い、訳してくれた台湾の共同研究者に、「これは誤訳ではないの？ そんなことありえないでしょう。親の恩を教えてくれてとか、そんなことをこの現代で小学校の子どもたちに教えるの？」と尋ねると、彼女は「教える」と言うんですね。「皆一緒に教科書を音読するのにこれは恥ずかしくないのか」と訊くと、彼女は「恥ずかしくない」と言うのです。日本の教科書で描かれる子どもとはずいぶん違うと思いました。つまり積極的に親に感謝を述べる子ども像が、この台湾の教科書の中には描かれているのです。

一方、日本の『お母さんの手』という作品です。まゆみという女の子が主人公です。まゆみが学校に行こうとしているときに、コンパスが見あたらない。お母さんに「コンパスはどこなの」と訊くと、お母さんは「知らないわよ」と言います。まゆみは、「また弟のけんじが、コンパスをいたずらしてどこかに隠したのではないか」と文句をお母さんに言うのです。ところがお母さんから「あなたがきちんと片付けないからいけないでしょ」と、反対に叱られてしまいます。そこでまゆみは「私だけ叱られた」と面白くない気持ちのまま、家を出て学校に向かうのです。

学校に行く途中で、まゆみは小学校1年生とそのお母さんの親子に出会います。1年生の子どもが「学校に行きたくない」とごねていて、その母親は困っています。それを見たまゆみは、「私が一緒に連れて行ってあげます」と親子に提案をします。その母親も「ありがとうございます」と言って、自分の娘を託します。そしてまゆみは、その女の子の手を握るわけです。「まゆみはふと、お母さんの暖かい手を思い出しました。するとさっきまでの尖った気持ちが、優しくほぐれていくように思いました。『さようなら、いってらっしゃい』。女の子のお母さんを見送ってから、まゆみは明るく弾んだ声で『さあ、急いでいきましょうね』と女の子に言いました。」という文章が続きます。

そしてここで話しは終わっています。つまり、まゆみは家に帰ってから、「お母さん、今日はこんなことがあってね。私、お母さんの恩がわかったわ」とは言わないわけです。しみじみと心の中で母親の恩をかみしめる日本の子どもといったように、先ほどの台湾とは対照的な行動でお母さんに対する想いが描かれています。

(3) 自己一貫型と自己変容型の7ヶ国比較

もう一つクイズを出します。「友人があなたの意見に反対したら、あなたはどうする？」という問題です。二択で答えてください。1番目は「できるだけ自分の意見を主張して、相手に納得してもらう。」2番目は、「その場の雰囲気を壊したくないので、自分の意見を変えて友人に合わせる。」さあどちらでしょうか。状況により1番も2番もありうるかもしれませんが、どちらが自分はより多くするかで決めてください。1番の「できるだけ自分の意見を主張して相手に納得してもらう方だという人。」では、2番の「その場の雰囲気を壊したくないので、自分の意見を変えて友人に合わせる方だという人。」他の手を挙げていない方はどうでしょうか。

多分、状況によりどちらにもなりうると思いますので、手を挙げない方はそれで迷っていたのかもしれませんが。1番目は「自己一貫型」と名付けています。自分の意見を主張して相手に納得してもらう行動様式を表しています。2番目は「自己変容型」です。自分の意見を主張するというよりも、周りに合わせる行動様式を表しています。それぞれ〈プライマリーコントロール〉〈セカンダリーコントロール〉というアメリカのワイツら(Weisz, Rothbaum and Blackburn, 1984)による名称がついていますが、これは彼らの研究をベースにしています。ワイツは〈プライマリーコントロール〉と〈セカンダリーコントロール〉のどちらの傾向が日米で多いかを比較しました。この研究を応用し、反対意見を言われたり、自分が望んでいる状況とは異なっている事態に陥ったりした時に、どのように行動すれば「いい子」、「いい人」、「あの人は人間ができている」と思われるかが、文化によって異なるのではないかについて、教科書に描かれた子どもの行動を分析しました。

分析対象の教科書は、小学校1年生から3年生の国語の教科書です。国語の教科書を取り上げた理由は、国語の教科書には無意識の価値観が反映されていると考えたからです。例えば道徳や宗教は、価値観そのものを教えるものであり、価値観が全面に出ます。しかし、国語の第一義的な目的は読み書きを教えるものであって、価値観を教えるものではありません。しかしそうであっても国語の教科書の内容には、その社会や時代の無意識の価値観が投影されていると考えたからです。

図2は、アジアと欧州の国々の教科書に描かれた子どもの行動の比較分析の結果です。台湾、中国、イギリス、ドイツ、フランスは、自己一貫型が自己変容型よりも多い国々です。それに対して韓国、日本では、どちらかという自己変容型が多いというように、大きく2つに分けられました。7ヶ国間で統計的に有意な差があり、韓国と台湾の間にも有意な差があります。

では、実際の教科書の中身を見てみましょう。まず自己変容型の割合が一番多かった、韓国の教科書からです。これは『トトとミミ』という作品です。トトとミミは鳥で森の中に住んでいるのですが、とても声が汚いのです。そこでこの森に住んでいる他の動物たちが、「もうたまらない」と引越してしまします。そうすると友だちがいなくなって、トトとミミは寂しがります。

そこで里に降りてきてみると、きれいな声で鳴く鳥がいることに気がつきました。「あのようきれいな声で鳴けば、自分たちにも友だちが戻ってくるかもしれない」と彼らは考え、自分たちの歌い方を変えたら、最後には友だちが戻ってきたというお話です。つまり、自分たちの汚い声を自分のアイデンティティだと思わず、自分たちのやり方を変えて周りに合わせる姿が描かれています。

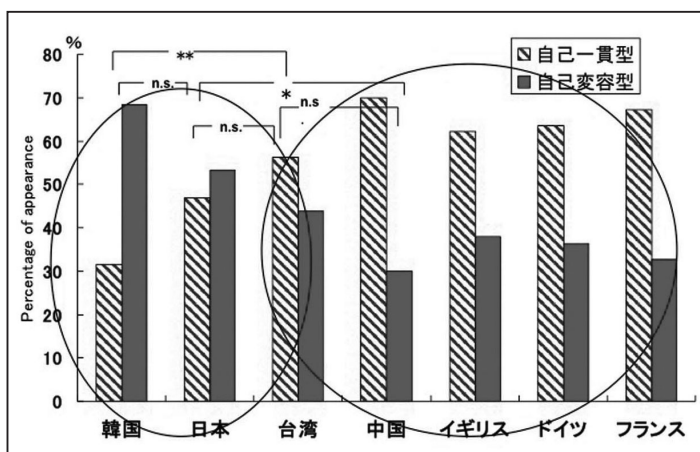


図2 「いい子」像の比較
 $\chi^2(df=6, N=764)=32.47, p<.001$

今度は、日本です。一年生の『ピーターのいす』という作品です。ピーターの家に赤ちゃんが生まれます。お母さんは赤ちゃんの世話で忙しく、ピーターが積木で遊んでいると、「静かにしなさい、赤ちゃんがいるのだから」と叱られてしまいます。それだけではありません。お父さんが大工仕事をしていて、ピーターが小さい時に使っていた青い椅子を、妹のスージーのためにピンクに塗り替えようとしています。ピーターは自分の居場所がなくなってしまったのを感じて、犬のウィリーと一緒に家出をします。しかもまだピンクに塗り替えられていない別の青い椅子を見つけ、この椅子を持ってウィリーと家出をします。そして家の外で、自分が大切にしていた青い椅子に座ろうとします。するとピーターは大きくなり過ぎてしまい、お尻が椅子に入らず座ることができませんでした。そこでピーターは気づきます、「僕は大きくなったのだ。」その後、お母さんが心配して、「ピーター帰っておいで」と呼びかけるのですが、ピーターは知らん顔をします。しばらくするとピーターは家にそっと戻ってくるのですが隠れています。お母さんが「どこに隠れているの」と声をかけると、ピーターはカーテンの陰から出てくるのです。最後にどうなるか。ピーターは大人の椅子に座ってお父さんに提案をします。「この青い椅子は、妹のスージーのために色を塗ろうよ」と。そしてピーターは、お父さんと一緒に椅子に色を塗ったというお話です。つまり自己変容型の話しです。「自分がこの椅子を大事にしているから、宝物にしたい」と考えるのではなく、自分の大事にしていた椅子を大人からの期待に応じて、妹に譲るためにピンクに塗るという提案を自らしていきます。

しかも特徴的なのが、日本の教科書によく見られる作品の最後の設問で、「ピーターやお母さんの気持ちを考えましょう」というものです。東洋（あずまひろし）（1994）が言っているような気持ち主義、所謂「気持ちを考えましょう」という設問が、小学校教科書の作品の最後にはよく出てきます。このように他者の気持ちや周囲の状況に配慮をして、自ら相手の気持ちを読み取って、相手の気持ちに沿うことへの期待が、日本の子どもには教科書を通して刷り込まれていきます。

もう一つ、日本の教科書の「自己変容型」の例です。これは『お母さんの紙びな』という作品です。

戦時中、お雛様を大事にしていた女の子は疎開している間も、いつかひな祭りの日に飾るのを楽しみにしていたのです。ところが、終戦後の厳しい食料事情によってお腹を空かせているこの子のために、母親はそのお雛様をお米に換えてしまいます。大事にしていたお雛様が売られてしまったという事実を知った女の子は、悲しくてたまらない。「本当のお雛様でないと嫌だ」と激しく泣くのですが、その姿を見た母親は黙って泣きながら紙でお雛様を作ってくれるのです。その母親の姿を見て、女の子も母親の行動を受け入れるのです。しかも、母親が作ってくれたように毎年、自分も紙雛を作るようになったというお話です。皆さんたちはすんなりこの話しを感動的な良い話しとして受け入れるのではないかと思います。母の気持ちを察し、自ら取るべき行動を悟る子どもが、教科書の中に描かれているのです。

では今度はドイツの教科書です。「自己一貫型」の例です。これはサンドラという女の子ですが、サンドラは男の子から小さな傘を買ってきて両親に見せます。すると両親から「そんなくだらないものを買ってきて、返してきなさい」と言われてしまいます。するとサンドラは、「私のお金で買ったのだから、好きなようにさせて」と親に言い返したのです。これで話しは終わりです。「私のお金」というのは、親からもらったおこづかいではないのかと私などはと思いますが、このように両親に言い返して終わりという自

己主張をする子どもの姿が描かれています。

もう一つドイツの教科書です。『モニと彼女の自転車』という作品です。モニが自転車の色を塗り替えようとします。モニは最初、緑色に塗りたと思っています。するとある男の子が来て、「緑の自転車、そんな草の色はおかしいよ、赤にしたら」と言います。モニも少しそうかなと思うのですが、また別の友だちがやって来て「赤の自転車なんておかしいよ、黄色にしたら」と言われ、そうかなと思っていると、また別の男の子がやって来て「青にしたら、青い自転車は格好いいから」と言います。最後にモニは何と言ったか。「私は緑がいいの、緑の自転車にするの。」そしてモニは緑の自転車に塗りがえしました、という話しです。これがもし日本の教科書だったら、どうなるのか。誰ちゃんは「赤がいい」と言った、誰ちゃんは「黄色がいい」といった。誰ちゃんは「青がいい」と言った。モニは「どうしようかな。皆の意見を取り込みたいな。」ではサドルは赤で、ペダルは緑で、ハンドルは黄色で、自転車はきれいな虹色の自転車になりました——というような終わり方になるかもしれません。つまり、日本の教科書で求められている終わり方と、ドイツの教科書で求められている終わり方とは違うということです。

今度はフランスです。『小さな魚』という作品で、「自己一貫型」の行動を見せる子どもが描かれています。ソフィーという女の子は油を使ってまごとし遊びをしたがった。ところがこのお手伝いさんは、「油で遊ぶのは洋服が汚れるからだめ、お塩だったらいい」と言って塩をソフィーに渡します。そしてソフィーが塩を振って遊ぶものと考えていると、お母さんが大事にしていた水槽と魚が目に入ったわけです。これで遊ぶと思って、魚に塩をふります。当然のことながら、魚は死んでしまいます。そこでソフィーは「やばい、お母さんが大事にしていたものだ。怒られる」と思いました。そこでソフィーがとった行動は何だったと思いますか。ソフィーは魚同士が戦って死んだことにしようと思って、魚を切り刻んで水槽の中に戻しましたというお話です。これ、教科書です。日本では「えっ」と思うかもしれませんが、教科書にこのような子どもの姿が描かれています。

(4) 自己一貫型におけるアジアと欧州の違い

先ほどの図2では、「自己一貫型」と「自己変容型」というように大きく2つに分かれるという話をしました。ここで皆さん、不思議に思いませんか。どうして台湾と中国というアジアの国々が、欧州の3ヶ国と一緒に「自己一貫型」の中に入っているのかと。実は台湾と中国、そして他の欧州の国々とは少し違うところがあります。図3は、同じ「自己一貫型」でも何に対して自己一貫型の行動をするかによって、分類したものです。つまり

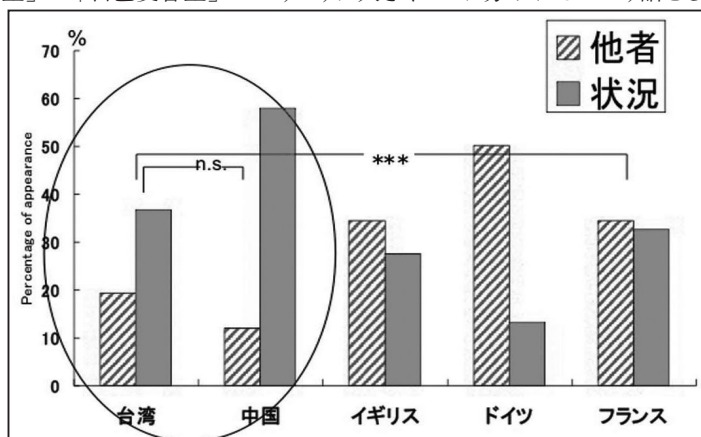


図3 自己一貫型が優位な国における刺激の種類
 $\chi^2(df=12, N=645)=77.51, p<.001$

誰か対立する他者に対して自己主張をするのか、それとも厳しい状況に対して自分のやり方を貫くのか、台湾、中国と、イギリス、ドイツ、フランスとでは少し異なります。

台湾と中国は、対立する他者に対して自己主張を貫くというよりは、厳しい状況に対して自分のやり方を貫くことが、どちらかと言えば多いという結果になりました。では実際の教科書に描かれた内容です。例えば中国の教科書には、貧しくて学校に行けなかったけれども、努力をして最後には、有名な科学者になったという話が描かれています。また雷峰という有名な人は幼少の頃、学校に行く途中で、水があふれている川に行く手を妨げられたが、一緒にいた後輩たちを背負って川を渡ったという話もあります。他には、ピンの口が小さくて底の水が飲めなかったカラスが、ピンに石を入れて飲めるようにしたという例があります。すなわち「困難な状況を変えることによって自分の当初の志を達成する」という例が、中国の教科書には描かれています。

台湾の教科書にも困難な状況に立ち向かう姿が描かれています。例えばある週末の夜、男の子が迷子になってしまいます。それでお父さんに平日頃から言われていたことを思い出して、いろいろと策を練ります。屋台のお店に行ってみたり警察官に助けを求めたりして、最後に両親を捜すことができたという困難な状況に対する自己一貫型が描かれています。

(5) 日本的な自己一貫型

もちろん日本にも自己一貫型の話がまったくないわけではありません。例えば皆さんたちがよく知っている『大きなカブ』というお話です。なかなか抜けない大きなカブだったけれども皆で力を合わせて、最後に大きなカブを抜いたといったような、困難な状況に対する自己一貫型は、中国や台湾と同様に描かれています。また『スイミー』という作品では、欧州的な自己一貫型が描かれています。スイミーが他の魚と泳いでいたけれども、マグロが出てきて仲間が食べられてしまった。そこで小さな魚が力を合わせて最後には大きな魚を追い返すという、対立する他者に対する自己一貫型も描かれています。

このようなアジアや欧州的な自己一貫型が見られる一方で、日本的とも言える作品が見られました。他国の教科書には出てこない特徴を持つ作品です。例えば『ニャーゴ』という作品です。この作品は、三匹の子ねずみたちが主人公です。子ねずみたちは「猫を見たら逃げなさい」と先生から教えてもらうのですが、この三匹の子ねずみだけが授業をサボっていて先生の話聞いていなかったのです。そこに「ニャーゴ」と言って猫が出てきました。ところがこの三匹の子ねずみは、猫が怖いということを知りません。そこで「ニャーゴ」と脅かされても「こんにちは」という挨拶だと誤解して、この猫にとっても親切にするのです。そして一緒に桃を採りに行くのですが、採り終わって別れる時に、「猫のおじさん、桃のお土産をあげようか」とこの猫に自分たちの桃を渡してあげるのです。そこで猫は、子ねずみたちの親切に心動かされホロリとなります。そして、子ねずみたちを最初は食べてやろうと思う気持ちがあったのですが、それが徐々に無くなって、最後には子ねずみたちを食べずに別れるのでした。このような無邪気に相手を信じていれば相手はきっと変わってくれるといった「自己一貫型」は、日本以外の他の国の教科書には、見られませんでした。

もう一つこのような特徴を持つ作品を紹介します。日本の教科書で、『きつねのおきゃくさま』という

作品です。きつねとひよこが主人公です。ひよこが家を探しているところに、きつねに会いました。「家を探しているのだけれど」とひよこが言うと、きつねが「うちにおいで」と言うのです。きつねの目論見としては、「このひよこを家に置いて、丸々太らせたら食べてやろう」と思っているわけです。ところがひよこは無邪気にきつねの言葉を信じます。「優しいきつねのお兄ちゃん」ときつねをすっかり信じてしまいます。他の動物たちも次々とやってきて、「優しいね、お兄ちゃん」と言うのです。すると段々ときつねもひよこたちに気持ちを寄せてきて、最後は狼が出てきて、ひよこたちを食べようとするのですが、きつねは狼に立ち向かって戦って死んでしまう。そしてひよこたちはそんなきつねの死に涙を流す、という話です。つまり無邪気な心というものがあれば相手の敵対心を減少させるというメッセージがこの作品の中に込められています。

このようなメッセージは教師用指導書の中にも描かれています。「無邪気さや優しさが天敵である猫の心に変化を与えた。優しさや思いやりの心は相手に伝わるのだ」、「汚れのない純粋なものに出会いしだいにひかれながら、それを守り抜こうと変容していく姿のすばらしさ」などが、『ニャーゴ』や『きつねのおきゃくさま』の指導書に書かれています。この話を大学の授業ですると、「なぜ、このような無邪気な心はいけなの?」「この優しさがいいじゃないか」と学生達は言います。そこで良い悪いという問題ではなくて、日本の教科書にはこのようなメッセージが流されているという事実が重要なのだという話をします。日本の子どもたちはこのような話に感銘を受けるよう、周囲から期待されていると言えるでしょう。

（6）教科書に描かれた「いい子」像のまとめ

教科書に描かれた「いい子」像のまとめをしたいと思います。一つ目は、国や文化によって、子どもに期待する「いい子」像が異なるということです。つまり「どんな人間になれば良いか」「どのように行動すれば良いか」が、国や文化によって異なるということです。これは、「自己」のあり方の違いにもつながります。図4は、ヘーゼル・マーカスと北山忍の有名な「自己」についての捉え方の図ですが、欧米の＜独立的な自己＞と日本の＜相互依存的な自己＞という自己の違いが表されています。欧米では自分と他者との境目は実線で描かれています。つまり、自分の考えと親の考え方とは違って当たり前。ところが日本では、「お友だちがあの言うから自分もそう思う」とか「お母さんがそう思うから自分もそう思う」というように、自分と他者の自己の間が曖昧なため、点線で描き表されています。自己のあり方が違うことによって、子どもたちに対して流される「いい子像」のメッセージも違うのではないかと思います。

二つ目のまとめは、アジアの国々の中でも「いい子」像が違っているということです。日本と中国とでは、違った「いい子」

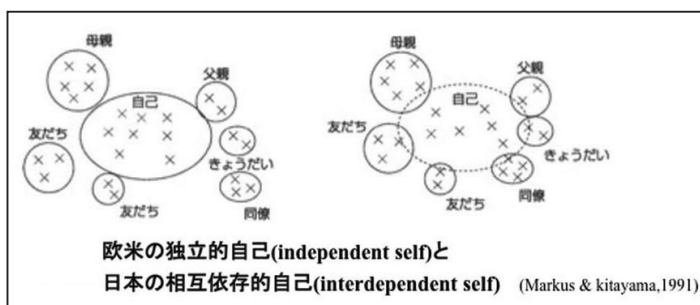


図4 「自己」のあり方の違い

像が描かれています。今、中国から多くの子どもたちが日本の保育現場に入ってきていますが、見た目は日本の子どもたちとあまり変わりません。しかしその子どもたちが中国で受けてきた保育と違うことを前提にして、日本で保育を行なうことも大切ではないかと思います。

3. 子どもの「はずれた」行動に対する保育者の期待

(1) ルールに反する行動への対処

子どもの「はずれた」行動に対する保育者の期待です。日本・中国・台湾の保育機関に行ってフィールドワークをしました。その際、子ども間のトラブルやけんかといったようなルールに反する行動をした時に、保育者がどんな声かけを子どもにするかについて観察しました。方法としては、マイクロ・エスノグラフィーという手法を使っています。まず、ルールに反する行動への保育者の対処です。子どもたちがざわざわしてうるさい時に、よく日本の幼稚園や保育所では、「ああ、まだお話し声が聞こえるね」とか「〇〇君が今、答えてくれたんだけど聞こえたかな」とか、積み木で友達を叩いてしまった子どもに対して「〇〇ちゃん、そんなことをしていいのですか。お友達の頭を積み木で叩いていいの?」といったような声かけをしていきます。ところがそれとは異なる声かけをする国もあるのです。日本人と中国人の先生の両方がいる北京の日本人幼稚園に行き、日本人の先生にインタビューをしました。「中国の先生の行動の中で、違うなと思ったことがありますか」と質問をしました。その時、日本人の先生はこう答えてくれました。「以前、子どもたちに中国人の先生が『うるさい』と言ったので、そのすぐ後に『子どもにはうるさいという言葉は、あまり適切ではない』と注意をしました。中国の先生は『知らなかった、教えてくれてありがとう』と言ってくれました。」そこで「先生だったら、どのように注意をしますか」と訊くと、「私だったら『静かにして』とか『うるさい』とか『声が大きいよ』と言うのではなく、『ありさんの声でお話しようか』とか『どうしたの?そんなに大きな声を出して』と理由を聞いて、もし大きな声を出さなければならぬのでしたら、『それなら外に出ようか』と言います」と答えてくれました。

つまり日本では、「まだ話声が聞こえるね」という暗示や、「ありさんの声でお話しようか」という比喩、「そんなことをしていいのですか?」という質問文などで、保育者は子どもに行動を修正するよう促します。一方、中国の保育者はルールを言語化します。「うるさい、静かにしなさい」というように、ルールを直接言語化していきます。したがってそのような環境で育った子どもが日本に来て、「ありさんの声で」と言われてもありさんが何を示しているか分からず、どういう声でしゃべったらよいか戸惑うでしょう。日本では直接メッセージを伝えるのではなく、比喩や暗示を用いながら、保育者の意図や気持ちを察してほしいという期待が、既に幼児期の頃から日本の子どもたちの教育の中に入っていると言えます。周囲の状況や人の気持ちを汲み取るのが日本の「いい子」ということが、ここからも立証されます。エドワード・T・ホール(1983)は日本の社会を〈ハイコンテクスト社会〉と呼び、明確な表現を避けて、コンテクスト(状況)からお互いに相手の意図を読み取るという対人行動が多く見られる社会と言っていますが、実は日本では幼児期の頃からこの〈ハイコンテクスト社会〉への適応が始まっているのです。この反対は、〈ローコンテクスト社会〉と呼ばれています。『文化としての時間』という本に書いてあります。図書館にもあると思いますので、読んでみてください。つまり、それぞれの文化、社会の中で大人が「よ

い」と思っている方向に子どもの行動は方向づけられて、それが実は幼児期から始まっているといえます。

(2) 子ども間のトラブルへの対処

次に子ども間のトラブルへの保育者の対処についてです。日本では、けんかが起きるとどう対処をするか。日本では幼児期からできるだけ子どもの力で解決してほしいと保育者は願っています。特に5歳児になったら、「自分たちでけんかを解決してほしい」と保育者は期待します。ここに2つの事例があります。一つ目は、「遊びの際に4歳児女児同士の遊具の取り合いに保育者が即座に介入。短時間で子どもを説得し、遊具を取られてしまった子どもは他の遊具を求めて走り去る」というものです。二つ目は、『自分たちでどうしたらいいか考えて』『できるだけ子ども同士で解決できるよう、大きなけんかになるまでは介入せず見守っています。』というものです。

どちらが日本でしょうか。二つ目の方が日本です。「子どもたちが『先生、なんとかして、誰々ちゃんがいじめた』と言うと、先生は『自分たちでどうしたらいいのか考えてごらん』とか、できるだけ子ども同士で解決できるよう、大きなけんかになるまでは介入せずに見守っています」というのが日本の保育者の語りの中でよく聞かれます。

一方で、中国に行った時に驚いたのは、保育者の介入のすばやさでした。子どもたちが遊んでいる際に、4歳の女の子同士の遊具の取り合いになりました。すると保育者がさっと介入をします。「あなたはこの車、あなたはこの絵本で遊びなさい。」それでけんかは解決をして、子どもは納得をしてしまうのです。そして、遊具を取られた子どもは他の遊具を求めて走り去る、という様子がよく見られました。これを日本にいる中国の留学生に本当にそういうことを経験したかと訊いてみると、「私も幼稚園の時そうされました」と言っていました。それで子どもたちは納得するのかと聞いてみると、「納得します。先生は偉いですから」と答えてくれました。このように保育者の介入の仕方が日本と中国とでは違うのではないかと思います。

日本ではたぶん、子ども間のトラブルも他者の気持ちを理解できるようになるための、一つの材料として扱われているのではないかと。つまり、他者の気持ちに配慮をしながらトラブルを解決するのが「いい子」だと思われているのではないかと、この日本と中国との比較で思いました。また、認定子ども園教育・保育要領が2014年4月に告示されましたが、その中にも「けんかなど葛藤を経験しながら次第に相手の気持ちを理解し、相互に必要な存在であることを実感できるよう配慮すること」というように、「相手の気持ちを理解する」という言葉が入っています。これは台湾や中国の保育要領の中には入っていません。日本独特だと思って眺めていました。もちろんその保育者の期待を子どもたちがどう受け止めるかは、子ども本来が持っている特性との相互作用ですが、子どもの行動は保育者の期待の中で形成される、ということを忘れてはいけないと思います。そして、保育者の期待から「はずれた」行動は、保育者が期待する方向に是正され、その「いい子」像の中で子どもたちは発達をするということです。

4. 「察し」の能力と保育・教育方法

最後に日本の「察し」についてお話しします。「察し」という、気持ちを大事にする能力が、日本の

保育や教育方法の中でどのように培われていくのかについて、中国や台湾の保育と比べてみたいと思います。

日本の幼児教育の中では「教え込む」というよりも「遊ぶ」ことが重要であるとされます。保育所保育指針や幼稚園教育要領の中でも「遊びの重要性」が言われています。遊びの中でも自由遊びの時間を多く取っている幼稚園・保育所が日本の中では見られます。日本のビデオを台湾の保育者に見せたことがあります。すると台湾や中国の保育者からは「日本の幼稚園はずっと遊んでるね」と言われました。それくらい日本の幼稚園では、台湾や中国に比べて自由遊びが多いと思われます。また日本では保育者は子どものモデルであることが求められますので、何か片付けをする時には子どもと一緒に保育者も片付けをすることがよくあります。ところが一方、台湾や中国の保育者には「教える」という役割がより多く求められます。幼稚園では知識の伝達が大きな比重を占めています。例えば3歳児で既に50分授業、10分の休憩という時間割があります。パソコンの授業や英語の授業、陶芸、ダンス、バイオリンの授業なども入ってきます。そして遊びに関しては、教師が意図したテーマ遊びが多いです。日本では幼稚園から子どもたちが帰ってきたら「今日は何をして遊んできたの?」と訊きますが、台湾では「今日は何の勉強をしてきたの?」と訊くそうです。つまり台湾・中国の幼稚園、幼稚園、保育所では勉強するという印象が親の側にもあります。そして保育者は、日本とは異なり子どもと一緒に遊びません。

これは、東先生がおっしゃっているのですが、日本では「滲み込み型」の教育、つまり教育者や保育者が自分の背中を見せて、子どもが学んでいくという型の教育方法が多く取られています。東先生は日米比較研究の中で、日本とアメリカの教育方法の違いについて述べたのですが、これを中国や台湾に当てはめて考えると、中国や台湾は「教え込み型」の教育方法を探っていると言えるでしょう。そして日本では、言葉を用いず保育者が自分の背中を見せて手本になるという〈ノンバーバル・コミュニケーション〉が重視されています。「見て育つ」非言語コミュニケーションです。そして台湾や中国では〈バーバル・コミュニケーション〉、言語でしっかり「静かにしなさい」と言うなどのコミュニケーションを多くとっている。このような違いの中で、子どもたちは育つのです。日本では、幼児教育の段階から、他者の気持ちを察することが重視されていく中で子どもたちは育っていくのです。

写真にあるのは、台湾の保育ママのスケジュールです。7時半から8時半は登園、朝食、8時半から9時半ビデオ視聴による学習というように、びっちり和时间割ができています。それからこれは知育玩具、台湾にはよくあります。これは2歳半の子どもが机に向かって、鉛筆を持って文字の練習をしている写真です。この子どもたちは4歳ですが、2桁の足し算を習っています。ここに数字が書いてあります。先生はマイクを使って授業をします。これは5歳児の保育の姿ですが、文字が書かれていて、先生が前に立っていて、これから何をするかについて話し合いが行われているところです。既に文字教育が始まっているのがわかります。本当は台湾の公立幼稚園では文字の読み書きを教えるはいけないことに法律ではなっていたのですが、大抵の幼稚園ではやっていました。このような傾向は、幼保一元化になり幼稚園と名称変更になった現在でも同様です。幼保一元化になり新しい『幼稚園教保活動課程暫行大綱』という保育の基本方針が示されましたが、言葉の力を育てる集団討論がさらに奨励されています。文字教育についても日本以上になされているのが実情です。

表1は中国の全托幼稚園のスケジュールで、子どもが月曜日に登園し、金曜日まで宿泊をするという幼稚園です。24時間預かります。その幼稚園でもスケジュールがこうにきっちり決まっています。月曜日、朝のラジオ体操から始まって、朝食、各領域の授業、体育能力の訓練、豆乳を飲む、英語などが入っています。そして金曜日の夕方に、親に引き取られて土日を家庭で過ごす。1週間のスケジュールがきちんと決まっているわけです。日本と台湾・中国とで異なる保育・教育方法によって、子どもたちが身に付けていくものも違うと考えられるでしょう。

時間	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
		起床洗面・歯磨	起床洗面・歯磨	起床洗面・歯磨	起床洗面・歯磨
7:00-7:25		水分補給・トイレ	水分補給・トイレ	水分補給・トイレ	水分補給・トイレ
7:25-7:50	朝のラジオ体操	朝のラジオ体操	朝のラジオ体操	朝のラジオ体操	朝のラジオ体操
7:50-8:20	朝食	朝食	朝食	朝食	朝食
8:20-8:50	各領域の授業	各領域の授業	各領域の授業	体育能力の訓練	英語
8:50-9:30	体育能力の訓練	体育能力の訓練	英語表現	体育能力の訓練	各領域の授業
9:30-9:40	豆乳を飲む	豆乳を飲む	豆乳を飲む	豆乳を飲む	豆乳を飲む
9:40-10:10	英語	各領域の授業	英語	各領域の授業	体育能力の訓練
10:20-10:50	各領域の授業	各領域の授業	体育能力の訓練	各領域の授業	英語
10:50-11:00	水分補給・トイレ	水分補給・トイレ	水分補給・トイレ	水分補給・トイレ	水分補給・トイレ
11:00-11:30	各領域の授業	各領域の授業	各領域の授業	モンテッソーリ授業	各領域の授業
11:30-12:00	昼食	昼食	昼食	昼食	昼食
12:00-14:00	散歩・午睡	散歩・午睡	散歩・午睡	散歩・午睡	散歩・午睡
14:00-14:30	水分補給・おやつ	水分補給・おやつ	水分補給・おやつ	水分補給・おやつ	水分補給・おやつ
14:30-15:00	各領域の授業		水分補給・おやつ	各領域の授業	
15:00-15:30	各領域の授業	舞踊	舞踊	各領域の授業	自由遊び
15:40-15:50	水分補給・トイレ	水分補給・トイレ	水分補給・トイレ	水分補給・トイレ	水分補給・トイレ
15:50-16:20	各領域の授業	各領域の授業	感覚の訓練	各領域の授業	
16:20-16:50	体を使った遊び	体を使った遊び	各領域の授業	体を使った遊び	体を使った遊び
16:50-17:20	夕飯	夕飯	夕飯	夕飯	夕飯
17:20-17:50	アニメ鑑賞	アニメ鑑賞	アニメ鑑賞	アニメ鑑賞	アニメ鑑賞
17:50-18:20	戸外遊び	戸外遊び	戸外遊び	戸外遊び	降園
18:20-18:30	果物の摂取	果物の摂取	果物の摂取	果物の摂取	
18:30-19:00		各領域の授業	各領域の授業		
19:00-19:30	室内遊び	各領域の授業	各領域の授業	室内遊び	
19:30-19:50	水分補給・おやつ	水分補給・おやつ	水分補給	水分補給・おやつ	
19:50-20:20	自由遊び	自由遊び	自由遊び	自由遊び	
20:20-21:00	シヤワー・歯磨	シヤワー・歯磨	シヤワー・歯磨	シヤワー・歯磨	
21:00-朝7:00	入眠	入眠	入眠	入眠	

表1 中国全托幼稚園（現地幼稚園）の1週間のスケジュール

5. 全体のまとめ

全体のまとめをします。一つは、子どもの行動は、周囲の大人の期待の中で育まれる。教科書だったり、保育者の声かけであったりと、そういった期待の中で行動が形成されるという点です。大人の期待から「はずれた」行動は大人の期待する方向に是正され、その「いい子」像の中で子どもは過ごし、発達をするということです。しかもその対処行動、「いい子」像、「いい子」の行動、学習方法だけではなく、どんな行動を良いと評価するかという「評価」も社会文化に合わせたものになっていく。つまり、「教育・保育環境や教育・保育者の価値観が、子どもたちに大きな影響を与えていく」ことを保育者は強く認識して、保育に臨む必要があるのではないかと思います。

そしてもう一つは、「子どもの対人関係の違いは個人のパーソナリティではなく、文化に根ざしているものである可能性を推測しながら」保育を行っていくことが大事だという点です。先ほどお話したように、今、中国、台湾、韓国から来日する子どもが多くなっています。例えば、中国から来た子どもたちはけんかをした時に、先生の顔をぱっと見ます。「先生、けんかを解決してよ」と見ているわけです。ところが日本の保育者は、できるだけ子どもの力で解決をさせたいと思って、「考えてみて」「できるだけ自分でがんばってごらん」「ほら、お友達に自分の意見を言ってごらん」と言うわけです。その時、保育者はその子どものことを「この子はいつもいつも『先生』と言って頼ってきて、自分で解決ができないのかしら、そういう性格なのかしら」と思ってしまうかもしれません。でも子どもとしては、「中国の幼稚園では先生が解決してくれるもの」だったし、子ども自身もそう思っていた。このように先生に対する期待感が国によって違うわけです。つまり、その子どもが「先生」を頼るというパーソナリティを持っている

るわけではなく、先生がいつも解決してくれたという環境で育っているから、先生に解決してほしいと思って言っただけなのかもしれません。ですから、他の国では保育環境や先生がどういう行動をしているか、どういう声かけをしているかという違いも併せて考えた上で、子どもに接していくことが必要ではないかと思います。これから、文化間移動をする子どもたちがより増えてきます。いろいろな環境の中で育っている子どもの存在を考えて、保育をしていくことが重要ではないかと思います。

ご清聴ありがとうございました。

一色：塘先生、どうもありがとうございました。それぞれの国によって違うということがわかりました。日本、中国、台湾、韓国、ドイツ、フランス、イギリスなど、これについてコメントを北野先生にお話いただきます。

北野：皆さん、こんにちは。神戸大学の北野幸子と申します。よろしくお願いいたします。とても面白いお話で勉強になりました。どうもありがとうございました。学生さんがたくさんいらっしゃいます。ちょっと質問します。幼稚園の先生になりたいと思っている人？あまりいないのでしょうか。保育園の先生になりたいと思っている人？子ども園の先生になりたいと思っている人？小学校の先生になりたいと思っている人？企業にいきたいと思っている人？4～5人ですか。もっと幼稚園・保育園の先生が多いかと思っていました。私は幼稚園の先生にならなくて昔、神戸大学の教育学部の幼児教育科に進学しましたが、結局、大学院に進み大学の教員をしています。なので、幼稚園・保育園に行くのは、とても楽しいと思っています。

おそらく皆さんが仮に幼稚園・保育園や小学校の先生になられた時に、今日のお話は直接子どもに接するときに大変役立つ話ではないかとうかがいました。教科書に反映されている「期待する子ども像」というのは、実はガチガチなそれだけが唯一無二のものではなくて、文化とか状況によって違ってくるのだというような軟らかい頭を持った先生になっていくことが、いろいろな家族、いろいろな子ども、そして国際化と言われるいろいろな文化の人たちと一緒に共生する時代には、大切なのではないかと思います。それから先生が明らかにしてくださった、日本の保育に独特なこと。これは、世界の保育のいろいろな現場にお邪魔しているのですが、同様に感じます。やはり領域「人間関係」を一番、現場の先生は大切にしておられる傾向がありますし、例えばトラブルというようなことも「いざこざ」と言います。先ほど先生がおっしゃったようにトラブルというのは問題という認識が英語でイメージした場合あると思うのですが、日本ではそれを保育の現場では「いざこざ」と言って、「いざこざ」を通じて子どもが他者を理解する力をつけていくから、「いざこざは育ちのチャンスだ」というとらえ方をしているということです。

教科書は、作るのもとてもお金がかかりますし、私も実は教科書作成にかかわっていますが、教科書は作るのはとても労力がかかりますし、とても配慮をして作ります。それでもやはり、普遍的とは言えないかもしれない価値の部分が教科書にはたくさん埋め込まれています。そのことを意識しながら要は、危険性もあるし、偏っているかもしれないし、そうじゃないものの見方もできるのかもしれないというよ

うな、そういったことを自覚しながら、現場の先生になって実践していただきたい。そういった意味では、今日先生が提示してくださった視点というのは、とても大事なことだと思いながら聞いていました。

私たちにとってこの阪神間の文化は、自明なことかもしれませんが、一步出るとぜんぜん違います。日本でも違います。先ほど先生が「自由保育」とおっしゃいましたが、神戸大学とか大阪教育大学では伝統的に「自由保育」とは言いません。「好きな遊び」と言います。「好きな遊びの時間」と言います。東京やその他の地域では、それを「自由保育」という言い方で呼ぶので、日本の国内においても文化の違いがある。それから地域の違い、そういうものがあるのだということを意識していただきたいと思っています。

教師となって教壇に立ったり、保育の現場で子どもたちの前に立つのであれば、やはり自分の中で育てほしい子ども像は持っていたいただきたい、と私は強く思います。「いい子」に育てほしいし、「いい子」になってほしいという期待を持たない先生がいるかな?と思ったりもします。でも一方で、それは一つだけの普遍的なものではない、文化が違ったら違うかもしれない。各国や各地や各園や各家庭の価値や文化があるのだという視点を同時に持って、そして且つ子どもの自立を支援する、「いい子」の育ちを支える保育者や学校教員になっていただきたいと思うわけです。最近の子どもたちの状況について平成 17 年の中教審の答申書では、やはり今の子どもたちは自制心や我慢する心や規範意識が少なくなってきた、ということが言われています。ある私立幼稚園で 8 年前に調査をしたデータと今年の春にデータ調査をしたら、例えば、おむつをしてくる 3 歳児が幼稚園で倍増していました。そういう意味では家庭の文化や機能が変化しているので、園に期待される育てたい子ども像というのも時代と共に変化をしているということもあります。

それから皆さんに紹介したいのは、神戸市が平成 25 年・26 年、〈幼児期における躰実践モデル事業〉というのをやっています。先程言ったように、お弁当の時間になったら手を膝の上に置いて、口を開けて待っている幼児が増えているというデータがあったりする。要は、(家では)親に食べさせてもらっている。そういう子どもが増えているとか、肘をついたり足を組んでご飯を食べている子どもに「駄目じゃないの」と言うとか、「お父さんもしているもの」と言う。このようなこともあったりして、今、躰の問題は大きくなっています。でも躰というのは強制して耳で聞いて教えるかというと神戸市がやっている躰授業はそういう視点からではなくて、まずは自己、そしてその次に他者の理解、そしてその後にモラリティとか規範意識。まずは愛着の形成、次に自己主張、自己発揮、そしてその後に他者への関心、そして規範意識、そのような育ちをしていこうということで、神戸市で今やっている実践自体は、まずは子どもたちが自分の気持ちを表すことができているのか。愛着や信頼感や自尊感情ができているのか。そしてその次に他者への配慮、他者の気持ちを思いやる力がついてきているのか。そして約束を守るとか、友達のためにきちんとおもちゃをかたづけるとかそういうところを育てよう、そういうことをやっていたりします。

世界の子どもの現状に目を向けます。今、いじめ問題が深刻です。去年、今年と国際学会の大会のテーマそのものが例えば、去年の環太平洋乳児教育学会でのテーマは、「子どもの共感感情を育む幼児教育」

というテーマでしたし、今年、韓国保育学会、日本保育学会の韓国版ですが、そのテーマも「Respectful Early Childhood Classroom Community」ということで「尊重しあう幼児クラス共同体づくりを」というテーマだったりしました。韓国ではいじめ問題が深刻で、やはり子ども同士の人間関係の教育、規範意識の教育、「いい子」像というのが意識されていて、それが幼児期から随分と力を入れて教育されているということが言われています。けれども、先程お話したように「いい子」の育ちを支える保育ということを考えるのであれば、一方で発達の特徴に基づき、いろいろな研究エビデンスを参照し、「かくあるべき保育」「この時期に育てたい良いこども像」というものを意識しつつ、他方で、それが無二の保育ではないかもしれない、文化の差があるかもしれないと、そういうことも皆さんには認識してほしいと思います。

まずは0歳、1歳で、愛着の形成、自己の育ち、自分の対する信頼感、自分が愛されている、可愛がられているというのをしっかり幼児期には培う。保育園に就職しようと思っている人たちは、是非とも、子どもの自尊感情をしっかり育てる、そういうことを気にしてほしいと思います。

それから2歳の子どもというのは、一生の内では一番目のある意味反抗期がくるといいます。2歳の子どもが一番つかう言葉というのは、「いやいや」「だめだめ」「私が、私が」です。そういう自己主張の時期は尊重されなければいけない、ということが分かってきています。それから他者への関心。日本では幼稚園教育要領は、3年保育を想定して作られていますが、例えば近隣の市などでは2年保育しかしていなくて、「3年にしよう」と一所懸命訴えています。他者への関心が起こってきている時に、「まずは好きなお友達からそして次第にクラスのお友達皆と」と一緒に遊ぶというのを育ててほしいです。

それから教育学の分野では、クラスのお友達のことを「教育資源」と言います。皆さんもそうではないですか。大学に来てから出会った友達というのが、自分にとっていろいろなことを気づかせたり教えてくれる存在ではないですか。集団保育とか集団教育の醍醐味というのは、そこにあると思っています。自分では感動しなかったような景色を見て「素敵だ」と言っている友達がいることによって、違う視点、他者の視点、自分とは違う感性というものに出会う。そういうことが集団保育の醍醐味であると思います。関心のある方は Nancy Eisenberg という方が思いやりの研究をしています。埼玉大学の首藤先生が翻訳を出していらっしゃいますので、是非読んでください。ちなみに私は去年ナンシー・アイゼンバーグさんに会いました。

簇の語源については、皆さん知っておいてください。簇というのは、仕付け糸の「しつけ」です。別に私が家庭科の中学校の教科書を書いているから言っているわけではないのですが、簇というと恣意的と思うかもしれませんが、そうではなくて自立して生きていくためのガイドのようなもの、簇という言葉についての意識を持っていただきたい。そして何より子どもの誇りにつながるような簇というのをしていただきたいと思います。

自分が望もうと望まなかろうと、幼児や小学校低学年の子どももそうですが、乳幼児は先生が大好きです。だから皆さんが子どもたちのモデルになります。皆さんの口癖が子どもたちにうつる。皆さんのしぐさが子どもたちにうつる。そういう意味では、「自分がモデルになる」という意識を持っていただきたい。だからといって、ガチガチになるほどのことはありません。完璧な人間はいませんから失敗もす

るし、たまには間違っただけとも言ったりするかもしれないけれども、教師になる・保育者になるということはモデルとして子どもたちに影響を与えるのだ。だからご自分の、所謂ことを常に内省していただきたい。今日先生がくださったデータというのは、その内省の大事なチャンス、方法に気づかせてくださる資料だと思います。「これしかないわけではない」ということを考える、或いは、「自分の今の行動や考え方が偏っていないか」「他の見方もできないか」「オアタナティブはないか」というように考えていただきたいと思います。

現場ではすぐに身体のサイズとか、ものを決めるときにすぐにじゃんけんで決めたり。それからいつも怒られる子どもが何となくやんちゃな子と思われていたりします。私の友人でおもしろい研究をしている人がいます。歌唱している時の子ども全員にマイクを着けて、どの子どもがどのように歌っているか、歌えているのかを調査してみると、先生がピアノを弾いている時に、ピアノが一番近いからピアノの音が一番よく聞こえることもあって、やんちゃな子どもは歌えていないと思っていたのだけれども、実は後で聴いてみると、とても上手に真面目に歌っていたことが分かった。そういう意味では、「私たちにある先入観にも気をつけよう」、そういうような気持ちを持っていただけならいいのではないかと思います。

最後に一つだけ、家庭の問題。今家庭が多様化している。それから家庭には、それぞれの文化がある。そして家庭の文化が、園や学校の文化と異なる時もある。なので是非とも、家庭教育環境を知るという視線を持っていただきたい。そして家庭教育力の向上への啓発というのを、保育の現場や小学校の教育現場に出た時には子どもの権利の代弁者として、皆さんが持っていただきたいと思います。家庭との連携について関心がある方は、ジョーンズ、ホプキンス大学院大学の地域家庭教育連携センターについて勉強してください。

では、これで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

一色：北野先生、どうもありがとうございました。すごく実践的、具体的に保育士、幼稚園教諭、小学校教師も含めてこういうところをしっかりと自分の心を持っていなさいというお話でした。どうもありがとうございました。

では、ここからはお二人の先生方がお話なられたところを更に、お二人の先生方でお話をさせていただこうと思います。塘先生、お話いただけませんか。

塘：北野先生、どうもありがとうございました。私は主としてマクロシステムの部分をお話したので、実践的なこともお話していただいてよかったです。私の場合は「いい子」という観点から国際比較をしましたが、いま日本は、いろいろな問題を抱えています。特に格差社会と言われていて、日本の幼稚園でも保育所でも、様々な背景をもった家庭の子どもたちが来ています。中には、家庭での躾と園での躾でずれが生じている場合もあります。「小学校の現場では自分たちが想像しなかったびっくりするような家庭がある」と小学校教諭になった卒業生が言っていました。このように、学校・幼稚園・保育所での決まりと家庭での躾がずれてくるということがありますが、それはどのように解決をしていけばよいのか、その辺りのお考えはありますか。

北野：国際学会に行きますと最近、家庭との連携の研究が心理学の研究の次ぐらいに多いです。いくら園でがんばっても、食育に力を入れてもお昼ごはんだけで3回の食事の中の1回なので、かくあるべきのところはある程度折衷的に、発達的に、或いは子どもの権利保障の観点から、必要だと思われることに関しては、やはり学校側つまり、園から、小学校から家庭に伝えていく。最近の家庭との連携研究では、日常性、双方向性、そういうことを配慮することが大切であると指摘されています。たとえば日本ですと参観日ですが、でも「参観」という言葉ではなくて「参加」さらには「参画」という言葉遣いによって変わっていくと家庭との連携が図れます。子どもにとっても精神衛生上も、園でいうことと家庭でいうことが違っていたら、子どもはとてもつらいです。だから子どもにとっての居心地の良さという観点からも正しい、あるべき「いい子」像というものを専門家としては提示し、それに対しての助言を家庭に啓発していかなければいけない。そういう試みが今、世界中でされています。

塘：どうもありがとうございます。私も台湾の幼稚園に行くと、それをよく感じます。ボランティアで親がどんどん園の中に入ってくる。そして園もそんな親を活用しようという考えを持っています。日本では「園と家庭と一緒に子どもを育てる」と言っていますが、それ以上に台湾では親がどんどん園の中に入ってきて、一緒に子育てをしようとしているのを感じます。多分、若い学生の方々は、保育所や幼稚園に就職して子どもに接すると思いますが、親とどう連携をしていくか。これをしっかり考えていく必要があるのではないかと思います。

一色：ありがとうございました。家庭と保育園、幼稚園とのお話をいただきました。もう少し「いい子」像についてお二人で深めていただきたいのですが、いかがでしょうか。

北野：文化は生きものだと思うのです。だから、例えば中国のすごいカリキュラムが出てきましたが、この前北京師範大学の幼児教育の関係者と話をした時に、「遊びの重要性とかそのようなカリキュラムが変わってきた」ということを言われていました。2007年以降あれだけ早期教育的で設定保育が多かったシンガポールのカリキュラムは、Free Play Based カリキュラムに変わりました。この前に、シンガポールの保育学会長を神戸大学に招聘してお話をさせていただいた時、2007年以前は、設定保育が午前2つ、午後一つあるといったカリキュラムでしたが、今では、午前一つ、遊びもたくさん入れているということを言っていた。台湾も今、幼児期の英語教育は規制するの方向で文科省が言っています。ですから文化もありますが、文化差を超えた「いい子」さも片方ではある。でも文化差を超えたこういう「いい子」像がそれだけでは、無理に「いい子」の価値だと思ってしまわないような、どうやったら両極端に行き過ぎない「いい子」像が持てるのか、その辺りを是非先生にご助言いただきます。

塘：難しいところですね。「いい子」像は、時代によってもずいぶん変わっています。何を子ど

もたちに望むかも変わっています。例えば「遊び」の捉え方にしても国によって異なります。中国・台湾どちらの保育要領を見ても、「遊びを中心にして」と書いてあります。でも、私の目から見たら本当に「遊びが中心」になっているか疑問です。「一日 30 分以上は遊ばせなければいけない」と台湾の法律で定められているらしく、この前、夏に日本の学生を台湾の幼稚園に連れていった時も「これから 30 分遊ばせます」と保育者が言っていました。「一日 30 分で遊びと呼べるのか？」と思ったのですが、遊びの捉え方が国や文化によって違う。また法律や環境、そして親の考え方も変わってきている中で、ECEC (Early Childhood Education and Care) など幼児教育の考え方も変化してきている。そのような様々な変化の中で、「いい子」像も変化してきていると思います。その中で普遍的な「いい子」像があるかという点、私はたぶんあまりないだろうと思っています。もちろん今回紹介した以外の研究の中で、「褒められたときにどのように対応しますか」という点に関する教科書の比較分析をしていくと、どの国でもどの時代でも褒められた時には、それを拒否せずにきちんと相手を受け入れるという結果が見られました。それは低年齢の子どもに対する大人が期待する発達課題なのだろうと思います。このようにわずかな共通点は見られるけれども、トラブルを起こした時にどう対処するのが「いい子」なのかについては、やはり文化によっても時代によっても違う。そしてそのどれが最も良いのかについては答えがありません。ただ日本では「察し」という気持ちが大切だと教育されてきたけれども、「やはり自己表現も大事です」という点もこれからは出していくと、21 世紀になって様々な国や人と交渉する時にうまくいかなければいけないかと思っています。「どちらかに偏る」「どちらがいい」というわけではなくて、そのバランスをとっていく子どもに育てることが必要だと思っています。だから保育者にとっても、自分が自ら考えて、自ら遊びを創造したり、他者に「この人はこうかな」「あの人はこうかな」という、2つの想像／創造する力が必要ではないかと思っています。一つはイマジネーションの力。他者に対する共感だとか、他者がどう思っているかと想像する力。もう一つはクリエイティビティ。他者と何かを作り上げていく創造する力が、保育者や教育者には必要だと思っています。

一色：ありがとうございます。時間があまりないのですが、何か質問かコメントがありますか。

学生 A：今日は貴重なお話をありがとうございました。塘先生が文化、国際的に考えた子どもの見方をされていたのですが、北野先生が紹介されていた『思いやりのある子どもたち』という本にとっても興味を持ったのですが、国際的な思いやりというのは、日本とどのように違うのでしょうか。

塘：とてもいい質問をありがとうございます。日本ではよく「思いやり」を持ちなさいと言います。小学校でも幼稚園でも保育園でも「思いやりを持った子どもになりなさい」と言います。でもアメリカや中国ですと、思いやりという言葉あまり使わないのです。でも「だから思いやりが大切ではない」とは思わないのです。他者がどう思っているかということは、他者と比較した上で

しっかり考えて自分の意見を言うことになります。ところが、先ほど自己の考え方を示しましたが「他者がそう思っているなら、私も合わせないと悪い」と、日本の思いやりはとかくそこにいつてしまいがちなのです。けれども、例えば、欧米だとそうではない。「あなたはそういう考えで私はこういう考えなら、違った考えなので違った行動をしましょう」というのがむしろ思いやり、他者を思いやるという気持ちに繋がっていく。だから日本の思いやりは、欧米の思いやりと少し質が違うという気がしています。

北野：ナンシー・アイゼンバーグの原語は、エンパシーです。だから自己があって、次に同じ共感を持つことのシンパシー。例えば一緒に遊んで楽しかった、私もあなたと一緒に遊んで一緒に楽しかった。そういう経験を積み重ねた子どもたちが、例えば今度はそこで転んで血が出ている友だちがいた時に、自分の足は痛くないけれども、「血の出ている友達が痛いだろう、かわいそうに」と他者の感情を理解する。これがエンパシー。だからそれに対して「合わせて自分がどうするの」というところが日本では入っている。他者の気持ちを理解するところまでは、ある程度日本でも外国でもドライにエンパシーということは分かると思うのですが、それに対して自分がどう行動するか、自分の意見を変えとか自分の行動を変えということは、これは日本の文化の独特のところではないかと思います。また、是非、本を読んでみてください。

一色：では時間になりましたので、ここで第一部を終了いたします。

< 第二部 >

一色：第二部を始めます。ではディスカッションを中心に、皆さんから挙手いただきたいと思います。今日は保育士、保育園の方もたくさんいらっしゃいますので、大いにいろいろなお話をいただきたいと思います。どなたかご意見、ご質問はございますか。

一般 A：今日はどうもありがとうございます。卒業生で現在、保育士をしています。「子ども学」の講演会を受けたのが久しぶりでした。当時は授業の一環として受けていたことが、保育士となって受けて初めて理解できた部分がありました。そういう点では、これからたくさん学んでいきたいという感想があります。

今日の内容ですが、国際的に保護者と保育者の考え方から見たいろいろなずれなのですが、それは何がいいのか悪いのかを考えるのではなくて、自分がどういう考えを持っているかというのをしっかりと自覚をして、それで子どもにどういう保育をしていくのかをしっかりと考えるべきだと思いました。家庭との連携も大事ですが、私は今2歳児を担当しておりまして複数名で担任をしています。保育者もやはり人ですから、人と人の保育者間でも指針にならったとしてもずれがあります。それでも子どもに対してのきちんとしたモデルが日本の保育者には求められるので、そういうずれもできるだけ話し合いなどで

しっかりと深めていくことが大事だと思いました。

一度、外国の子ども、ロシアの子どもだったのですが、どうしてもお母さんとの価値観の違いやこちらの考え方、例えば園の決まりなどでどうしても差が埋まりませんでした。例えば、「私の個人的なこういう働きかけによって、子どもはこういういいことができた」と伝えることによって、「保護者にもやってもらおう」と保護者とのずれを埋めていくように努力しているのですが、そういう場合は更にどうすればずれが埋まっていくのかという疑問があったので、具体的に教えていただければと思います。

塘：ありがとうございました。今、そういう園はたくさんあると思います。例えば京都ですと中国から来た子どもが多いので、中国のお母さんと子どもがやってきて、特に「中国は足を温めるのが大事だから、靴下を履かせてほしい」とおっしゃいました。でも保育園では、やはり滑って転んでしまうといけなないのでよく裸足にさせます。そうするとそこでトラブルになります。他にも、中国ではしっかりと厚着をさせるのに日本は薄着ですので、「風邪を引いたらどうしてくれるのだ」というようなクレームがあったりします。そういった場合はやはり命や健康に関わることです。ですから、最初から薄着にさせることは、あまり園ではしません。子どもはだんだんと気候に慣れていくので徐々に慣らしていったら、「自分は暑いから脱ぐ」と言って、子どもが自分で調節ができるようにさせるようにすると、親もそれで段々と納得をしていく。または子どもが「友だちが薄着になっているから、私も脱ぐ」と言い出す。そういう形で環境に慣れるのを少しずつ待つことを、実践している園があります。「こちらの園ではこういう方針です」と急に押し付けるのではなくて、親は親で自分の今までの経験から子どもに良いと思って子育てをしてきています。だから親の考えも尊重し、「園の考えはこうです」と伝えながら、少しずつ子どもが変わるのを待つのもよいと思います。また、先生がやっていらっしゃるように、「この園ではこのようにしています」「そうするとこのような子どもが育ちます」とか、「日本の遊びにはこのような意味がある」などをしっかりと親に説明ができることが、これからの保育者には必要ではないかと思っています。

よく中国の親御さんが来て、「どうして日本の園ではそんなに遊ばせるのか」「勉強をさせてほしい」「もうすぐ小学校なので間に合わないから、ひらがなくらい教えてほしい」と言うのですが、例えば遊びを中心にしている園としては、遊びは重要だからやっているわけです。だから遊びの重要性をしっかりと語れることが、保育者にとって必要だと思っています。

一色：夢保育園の園長先生にもおいでいただいているので、今日のシンポジウムを聞かれて何かコメントがあればいただきたいのですが、いかがでしょうか。

一般 B：社会福祉法人夢工房、夢保育園の園長です。今日は先生お二人、どうもありがとうございました。このようなすばらしい講演会というのは是非、園長会でしていただきたいと思っていました。園長といえども人間ですから、本当にたくさんの若い先生方を育てていくのと共に、保護者、子どもの中で子どもたちが居心地のいい、明日も行きたい、先生と出会える大好きなそ

して素晴らしい環境の中で友だちに会えるという居心地のいい、明日も行きたいという保育園を作っていくには、私たちはまだまだいろいろなことを模索しています。お二人先生がおっしゃったように、私も神戸市の幼稚園にも保育園にもおりまして、今社会福祉法人の民間と辿ってきているのですが、その年輪の中にどんどんと変わってくる保護者の想いというのは、本当にこの数年変わってきました。でも先生がおっしゃったように親にとっては、本当に大事な宝物、子どもの成長の喜びを見ていらっしゃった想いがとても伝わってくるのです。でもその中で、「私の子どもにどうして」「私の子どもだけは」というのが奇抜に、これだけの意思を持ってわが子のことを言えると思ひながら、「お母さんは強いですね」とまず言います。1週間に3人ぐらいお母さんが教育相談に来られます。でもそれをするによって、園長先生が話を聞いてくださるというので、苦情解決が出てこないというのがやはり、先生方が子どもを大切にして、保育をしやすい現場を造るのは私の役割だ思ひながら聞かせていただきました。もっと文化のことも入れていかないといけないと思ひましたし、家庭との連携というか殆どお母様ですから、お母様との関係を作ったらきっと美しい花が咲いてくれるのではないかと考えております。今のお母さんとの連携の中で一人ひとり皆違いますので、そのところを今日はお二人の先生から大切なものを教えていただきました。すぐ園にもどって職員会議で話をしたいと思ひました。

北野先生がおっしゃっていた神戸の躰の本も、北野先生も神戸市の幼稚園の躰を教えてください、それもずっと目を通していただいているのですが、躰と言うとお母さんたちには縛っているとられがちになりますので、その辺りを本当に子どもが大人になって、自分が誇りを持って社会に出られるところを育てていくその幼児期は、私たちだと思っています。でも今は本当に保護者対応というところに、我々は悩むというか勉強させていただいている。一人ひとりの想いをまず受け止めないといけない。簡単なようですが、次はこれを納得していただく説得する力というのを身につけていけないと、つくづくと今日のお話の中から大きな収穫をし、心の中が少しゆったりとしたような気がいたします。今日はありがとうございました。

一色：どうもありがとうございました。では、他にどなたかいらっしゃいますか。

一般C：今日はどうもありがとうございました。私は今は働いていないのですが、子どもに関わる仕事をしたいのですが、どういう方向に進むか迷っています。福祉以外も考えているのですが、そこでも迷っています。躰といいます、これは強制という意味が入っているのではないかと思います。私も働いている時に「躰だ」と言っていじめられたことがあり、それから私は「躰」という言葉をきくと、ちょっとぎくっとします。保育園の実習もしたことがあるのですが、子どもがピアノに登っていたことに対し注意をしなかったことで、担任の先生に「そのような危険なことをしているのになぜ注意しないのか」と言われ、「それでは保育士にはなれません」と怒られました。躰というのはどういうことなのか、先生方だけではなく、現職の保育士さんにも意見を伺いたいです。

一色：今、躰という言葉が「締め付けられる」という感じになっているのでその辺りだと思うのですが、いかがでしょうか。

北野：先ほどスライドもお見せしながらお話したのですが、確かに躰という言葉の使われ方に強制的なイメージがあります。だから、神戸市の教育委員会が神戸市の幼児期からの躰実践のプロジェクトをするにあたり、躰というのは教え込みだったり強制だったりというイメージに囚われがちですが、私が研究をご一緒させていただくうえで共有しようと確認しているのは躰の語源が仕付け糸であるということです。仕付け糸というのは、本縫いをする前にこのようにガイドするものです。自立性を育む、自ら子どもが生きていく力を培うために援助する、導くという意味があるので、そのところを子どもの躰といたら強制ではなくて、子ども自身が自分で考えて自分で行動できるように自立性を育む援助である、という捉え方をしておかないといけないと思います。そして躰というのは、躰を得る人と躰ける人の間の愛情とか相互の信頼がないと成り立たないので、そういう意味では強制とかそういうところのみでは難しい。でもやはりピアノの上には登ってはいけませんので、「ピアノの上には乗ってはいけません」と言うのは当然と思いますし、やはり、物や人を傷つけたりは人権や倫理の問題ですから、そういうところは大事にしなければいけない。やはり人間同士の関わりとか相互の感情理解とか、躰けるのであれば子どもの誇りに繋がること、子ども自身が「このようなことができるようになったら、私はますますいい子になるのだ」と自分に自信が持てるような。「怒られた自分は駄目な人間だ」ではなくて、「こういうことが分かった、これが出来るようになった」「これを知った。だから私はまた成長した、偉い」のように、子どもが「いい子」だと思えるようにすることが大事だと思います。

一般C：私も叱ることはできます。でも教育実習の時に大きな声で叱ったら子どもには嫌われるし、怖がられるしで、注意することも怒ることもできなくなり悩んでいるのです。

一色：今日のテーマで躰の話をしましたが、躰の意味合いについては、北野先生がおっしゃった通りだと思います。今日のテーマにとって、躰についてはここまでとさせていただきます。よろしいですか。

塘：叱るというのはたぶん愛情の表現だと思うのです。子どもを叱るには、愛情がないと叱れません。「この子どもにはこうなってほしい」「危険を回避してほしい」という思いで叱るのですから、「あなたのことが嫌いよ」ということで叱るではありません。あなたのことが好きだから、あなたにこうなってほしいからという愛情を持って叱られたと子どもが思っていれば、子どももそれをバネにして生きる力になってくるのではないかと私は思っています。

その時点で分かってくれなくても、もしかすると5年後、10年後に分かってくれるかもしれません。教育というのは長いスパンでみないといけないと思うのです。だからその時は「先生から叱られちゃっ

た。悲しいな」と思うかもしれませんが、もしかするとその子どもは5年後に「あの時、先生に叱られてよかった」と思うかもしれません。だからそのような叱り方を保育者の方でしてあげることが大事だと思います。

一色：では、他の方でご質問、コメントなどございますか。

一般 D：今日はありがとうございました。私自身は保育の専門家ではないのですが、2, 3歳児の自然体験をする NPO をしているのですが、国際化の中で今、いろいろ文化に基づいた子ども観というものが国によって違うということも、自分で子育てをしていたらよくわかります。例えば、価値観もどんどん変わっている今の時代の中で親自身も非常に悩んでいるというか、本当に子どもを育てることが難しい世の中になっているというのは痛感しております。分化差を超えた「いい子」像があるのではないかとか、日本の思いやりと欧米の思いやりは違うとか。例えば、自己を大事にするとか相手の気持ちを思いやる、それから日本は察するとかそういうことも含めて、文化的な違いがあると思うのですが、そのような日本の文化の独自性みたいなものについて、どのように考えていらっしゃるのか伺いたいと思います。

塘：日本と他国の国際比較をする中で、日本的な思いやりや察しなど日本独自のものが悪いとは思いませんし、日本の今まで築いてきた文化はとても大事だと思います。他の国に出かけて行けば行くほど、日本のよさは見えてきます。海外の幼稚園に行っても、日本の幼稚園はすごいと思うことが多いのです。もっと誇りを持ってよいと思うのです。そのように日本で培われてきたものは大事にしていきたいし、それはもしかすると今後世界標準になるかもしれません。でもそれと共に、他の文化の人たちが一体どのようなことを考えているのかを少しずつ取り入れていっても良いと思います。日本は自己主張しないと言われていますが、やはり「自分はこうだ」という意見を堂々と言うこともある程度必要で、先ほど申し上げたように、やはりバランスだと思います。欧米の人が自己主張ばかりをしているかというとは実はそうではなくて、他の人の意見を尊重しながら、やはり「自分の意見はこうだ」と言う。「この場合はあなたの意見を取り入れましょう、この場合は私の意見を通しましょう」という形で、バランスをとっていると思います。そのバランス性というのが、大事ではないかと思っています。答えになりましたでしょうか。

前田：どうもありがとうございました。本学で美術を担当している前田と申します。その国の教科書に表れてくる心の形について、少しお訊きします。子どもというのは、その国の価値観に育てられていることがとてもよくわかりました。そして、現場では、「はずれた」行動とかトラブルとかに対する対処の仕方に特によく表れているということですが、もう少し論を進めて、逆の概念で考えてみると、よりわかりやすくなるかもしれません。例えば共同とか協力とかいうこと。共同にもいろいろな漢字があるようですが、共同や共同イメージ、それが外国と日本では、例え

ば教科書で、どのような形で提示されているのか教えていただきたいのです。私は美術の教師として、共同制作という言葉がありますが、一口に共同制作といっても、中々難しいところがあります。場合によっては、共同が下請けになったり、分担を意味したり、単なる寄せ集めになったりと、いろいろな共同があるのです。だから私は、割合懐疑的な目で共同制作を見ることが多くなります。10歳以上の子どもはさまざまな行動をしますが、いろいろな国は共同をどのように見ているか、教えていただけたらと思います。

塘：共同については特に分析をしていないのですが、日本と欧米の共同のあり方は少し違うのではないかと思います。小学校の教科書にはいろいろな子どもが出てきます。例えば、フランスの教科書にはフランス以外の違った国の子どもが登場し、「私は何の言語を使っています」「アフリカから来ました」など様々な出身の子どもが出てきます。「私の家庭は離婚家庭です」とか「私は養子です」とか、いろいろな背景をもつ家庭の子どもも描かれています。髪の色も違う、目の色も違う子どもが教科書の絵の中に描かれています。子どもはその教科書の絵を見ることによって、いろいろな人たちがいるのだという認識をしていきます。その中で「共同するとは一体、どういうことか」という学ぶ出発点が違う。日本の場合には、「自分と他者は同じだということから出発している、だから皆で仲良くしよう」となる。一方、欧米の教科書ですと仲良くできないかもしれないし、「もしかすると違った価値観、言語を持っているかもしれないけれども、でも何か一緒にやっ払いこう」といったように、出発点の描かれ方が違うと思われます。日本の子どもたちの現実はどうかということ、やはり強い者がリーダーシップを執って、弱い人たちを巻き込むという協力の仕方が、小学校や幼稚園の現場でもよく見られます。しかし、ドイツの小学校に行くと、小グループで話し合いをさせる時に、誰がリーダーシップを執るかだけではなくて、弱い子どもの意見も取り上げるように先生は促しています。「あなたの意見はこうだけれども、あなたの意見は違いますね」と対比させるような形で最後にまとめあげていくことを、教育者はしていると思います。日本ですと、そういう活動もしているとは思いますが、何となく教師の思っている考えを発言する子どもの意見にまとめ上げられてしまうような気がしています。どちらが良い悪いという問題ではないのですが、多様性の中でまとめるのか、同質性の中でまとめるのかという点が、日本と欧米では異なると思います。

北野：私はフィンランドの3、4年生の国語の教科書が面白いと思いました。日本ですと作文という原稿用紙を渡されて、「書きなさい」と言われ。それで「3枚」と言われたら、3枚目の最後の方になると、つけ足して一杯書くという感じですが、フィンランド教科書では友達と一緒に作文を書くのです。だから3人から5人のグループで「一緒に相談をして作文を書きなさい」と言われます。先ほど先生がおっしゃったのと同じことを、私は海外の特にヨーロッパの教科書を見た時には思っていました。つまり日本ですと、同じところを探した折衷案型の共同性が高いように思います。けれども海外の場合は、自分とは違う多様性についての尊重とか寛容性の方に

シフトしていった、新たなものを創る。3人で一緒に作文を作ったら、同じことを集めて書くのではなく、「ここは自分とは違うけれども、これは入れよう」とか新しいものを作ります。要は多様性とか違いの方を集めて新しいものを作るというようなその辺りの違いが、多様性に対して同化ではなくて、それを尊重して新しいものを作るというような先ほども言いましたクリエイティビティの様相があるのではないかと。どちらがいいというのではなくて、読んでどちらが心地がいいかというと、私は日本人ですから日本の方がいいなと思ったりしますが、共同性が同じところだけを探して折衷案型になっていくと、特に芸術の分野ですとクリエイティビティはどうなるのだろうと思ったりしました。

前田：今日の最初のお話の中でとても驚いたのは、無邪気に接していれば、きっと幸せになれるということです。あれが日本の一番極端な価値観の例、知恵や叡智といいましょうか、分からせ方だと思いました。それは、今お答えいただいた同一性の中に安定とか幸せなどがあるという考えの究極・最終版といえるのではないのでしょうか。現実にはいろいろといじめや虐待などあるのに、そういうことなのですね。なかなか難しい問題だと思います。

塘：韓国、日本、中国と台湾の先生に、『『ニャーゴ』や『きつねのおきゃくさま』の作品をどう思いますか』という質問紙調査をしました。すると日本の先生はあの無邪気性に高い評価、ポジティブな評価を与えるのです。他の国の先生は「あんなに無邪気だと駄目だろう」と。それは多分、韓国との間の独島問題、竹島問題にもつながってくるのではないかと思います。日本のように「こちらが信じていたら相手は変わってくれる」と、あそこまで無邪気に信じてよいのかと思ったりするのです。その辺りの価値観の違いが、いろいろな国同士の解決の中でもうまいかかないところかと思えます。その他、中国の教科書では、ヤギと狼のお話が出てきます。狼が穴にはまってしまって、ヤギに助けを求めます。「助けてくれ」とお願いするのです。日本ですと、「狼は改心しているのだから助けてあげよう」とすると思うのですが、中国の教科書の話しの結末は違います。ヤギは狼に「いつか猟師が鉄砲で撃ちに来るから、そのままにしておこう」と言うのです。それで話しが終わるのです。そういう国と今交渉をしていることを意識するのも大切です。日本の無邪気性が悪いとは言っていない。信じる気持ちはとても大切なのですが、相手の特性を踏まえた上で相手と交渉する力も大事ではと思います。

一色：他にどなたかいらっしゃいますでしょうか。

一般E：一番思うのは、保育関係の仕事をしているのは女性が多いです。ですから「女性」性というのがどんどん刷り込まれているようなそんな感じがして、だから嫉とかそういう言葉を聞くと、私自身はいらっとします。かわいらしさを押し付けようとしている。一番思うのは、チャレンジ性をつけていかないと留学生が減っているとか、珊瑚の密漁の問題にしても、中国は300

隻も台風が来る危ない海域に船を出して、日本はそれを取り締まる船が少ない。聞くと、海上自衛隊などもどんどんと定員が割れている。そういう中で本当にチャレンジ性を持った人間がどうやって育ってくるのか、その辺りを考えてほしいという気がしました。保育ですから最初は大事に育てていくのですが、保育はチャレンジ性を持たせるような人間にどこで切り替わるのかそういう問題も考えるべきかと思いました。的外れかもしれませんが、そんな意見を持ちました。

北野：幼児期、8歳ぐらいまでが、好奇心と探求心と新しいものにチャレンジしたいというような気持ちが大変高いといわれている時期です。そういう意味ではもちろん、規範意識とかモラルが大事ですが、私たち、幼児教育の専門家が躰とかモラルとか規範意識という時には強制的なイメージではなくて、まず自己を大切にしたいものです。そして他者の認識、社会化というのが入りつつもでも主体性の尊重、環境を通じた教育、遊び中心の教育と言った時に大事にしたい。子ども自身が面白そうだなと思う気持ちであるとか、なぜこのようになっているのか知りたいとかあれをやってみたい、チャレンジしてみたいという気持ちが発達的には8歳ぐらいまでの子どもが最も高いので、その芽を摘まないようにしたいものです。子どもがやってみようとか、こうしてみようという、チャレンジ、そういうことも同時に育てていくのはもちろん大事なことだと思っています。発達的にそれをしなければいけない時期はおっしゃる通り幼児期なので、実際大事にしようとしているところだと思うのですが、その後実際にどうなっているのかが中々わかりませんし、園による差も大きくて、そういう意味では、子どものチャレンジ精神がやりたい気持ちとかしたいこと認めてないような園もあり、格差があります。その辺りをしっかりと見ていけないといけないと思います。

一般F：保育園の関係者です。躰ということでこだわりがあるようなのですが、私たちは本当に今、先生がおっしゃったように、幼児期というのは人間形成の一番の土台。例えば、家を建てるときの最初の土台だと言われているので、その時にしていいこと、悪いこと、例えば、保育園に来れば集団の中で見よう見真似で遊びを通して学習をしているのです。今、子育て支援などでお母さんと一緒に子どもを通して遊びながら子育てを私たちが応援している時にやはりよく質問にでるのが、「テーブルの上に上がったときはどうしたらいいのでしょうか」「何度下ろしてもだめです」と言われます。2歳ぐらいでとても好奇心が旺盛だから、高いところの危なさを感じないですから、その時に「ここは上がってはいけないところ、でもここはお母さんがしてあげた台だからここは遊んでもいいところよ」という、そのしていいところと悪いところで子どもの挑戦力とか今やりたいということろ察してあげてください。その時「ここは駄目」では駄目で、していいところと悪いところ、子どもが繰り返しの中でそれは自分が身につけていくと思うのです。だからただ「しては駄目」ではなくて、「ここはごはんを食べるところだから駄目で、ここは遊んでいい台だから上がってもいいのよ」と子どもに実際にそういうことをしていくと、子どもはそれを繰り返しの中で自分で学習して学んでいくと思うのです。それが知らないうちに身につけて、いいこ

と悪いところ、ここはしてもいいところ、悪いところというのを年齢の発達の中で覚えていくのではないかな。本当にいろいろなことがでてくるのですが、ひっかきとかでてきますが、ひっかいておけばいいのではなくて、やはり喧嘩をして帰ると、これはハーフの子どもさんの話ですが、お父さんは「2つ叩かれたら1つは叩き返せ」という。お母さんは「絶対にだめよ」と言われた時、私たちは子どもたちにどうするか。子どもは、「お父さんは2つ叩かれたら1つ叩いてもいい、ママは絶対に駄目と言った」と訴えてきます。先生は保護者にそれを伝えなければいけない。その時に「あなたはどうかの」「お父さんの気持ちとお母さんのその言葉で、あなたはどうかの。」「僕は叩かれて痛かったから、叩きたくない」と言ったときに、今度はお父さんにその言葉を伝えると「そんなことを言いましたか」とお父さんはその言葉に自信を持つ。あなたはいいことを言った。それは子どもが自分で学習をして、想いを先生に伝えたことだと思うのです。だから、決してそのところがしていいこと悪いこと、子どもの気持ちを大切にしながら親に伝えていって、親にもわかっていただく。親というのは子どもがそういうことを言うのととても嬉しいですから、そういう伝え方をしています。そういうところが躰に繋がっていくのではないかなと思っています。いかがでしょうか。

一般 C:私も先ほどの先生の話聞いて、反省をすべき点があると思うのです。私は発達障害で今、病院に通っているのですが、私も家庭暴力が激しくて、病院に行くまでは、混乱状態で興奮しやすくで錯乱状態になるのです。今年の2月に親にとっても腹が立つことを言われ親を蹴り病院送りにしたことがあります。そういうことがあり今反省をしているのですが、今日のお話を聞いてとても反省しました。だから、私の病気も皆さんに分かってほしいのです。私は親を殴ってしまったけれども、好きで殴ったわけではありません。訴えることができないから暴力をふるったというのをわかってほしいのです。すみません。

一色:今日は文化が子どもの発達をつくる、その中で「いい子」像というのがメインでした。文化の違いや価値感の問題がその中に入っているということについて、お2人の先生からいろいろな情報をいただきました。日本の場合は同一性というのがベースにあるのが確かなのですが、やはり多様性という世界の中で、子どもたちが健やかに育っていくためには将来的にはある部分一緒になっていくところもあると、そんな感じで各国の保育士の先生方がやっていただけるのではないかな、と私自身は思いました。今日はどうもありがとうございました。